

# 水辺から街づくりを考える

## — 寝屋川再生ワークショップを通じて —

### 1. はじめに

寝屋川は大阪府交野市に源を發し、寝屋川市、四条畷市、大東市、東大阪市を経て、大阪市京橋口で淀川の派川である大川（旧淀川）に合流する大阪府下有数の一級河川である。最大の支川は、柏原市に源を發し、八尾市、東大阪市を経て、大東市の住道（すみのどう）で寝屋川に合流する恩智川で、住道付近から下流は感潮区間となっている。流域の南北の境界には、淀川と大和川が流れており、両河川から農業用水が取水され、流域内を網目のように分かれて流れている。流域の西部は地盤が低く、自然排水が困難であることから、いくつかの治水緑地や多くの樋門、排水機場が設けられ、さらに、近年では地下に大規模な調節池や放水路が建設されている（図一1）。



図一1 寝屋川流域図

かつての寝屋川は、「野崎詣りは屋形船で」と歌われたように、田園地帯を流れるのどかな景観を呈していたようであるが、戦後急速に都市化が進み、特に昭和47年に発生した大東水害以後は、かみそり堤と呼ばれる薄い板状の堤防で川と街が仕切られ、水辺の景観といえば、コンクリートと矢板のほかは、高い垂直壁に垂らされたツタがわずかに潤いを感じさせるのみとなっている。寝屋川の水質は以前、生

摂南大学工学部都市環境システム工学科  
水辺環境創出研究室教授 澤井 健二

物が住めないほど悪化したが、下水道が普及する一方、淀川の水量が多い時には、寝屋川市の木屋（こや）地点から淀川の水が浄化用水として流されるようになり、かなり回復している。流域内の水道水源は主に淀川に頼っているが、最近では枚方市の渚処理場や大阪市の平野処理場の下水処理水が河道に放流され、水質面ではともかく、水量の確保に役立っている。

このように、種々の問題点を抱えた寝屋川流域であるが、最近、行政と市民が協働して水辺を再生しようとする動きが活発になり、全国的に注目されている。

### 2. 淀川愛好会の発足

私の勤務先である摂南大学は淀川にほど近い寝屋川市池田にあり、毎日のように淀川を眺めながら、教育と研究を行なっている（写真一1）。着任早々の1993年、学舎の屋上にビデオカメラを設置し、常時研究室で淀川の様子をモニタリングできるようにし



写真一1 摂南大学屋上から見た淀川

たが、詳しい川の様子はやはり水辺へ出ないとわからない。1997年の初め、同僚から、「淀川が汚い。河川の専門家として何とかできないか。」と言われ、さっそく河川敷へ行ってみた。汚かったのは水かと思っていたところ、実は捨てられたゴミであった。そこで、学生と河川敷の清掃に取り組むことにした。「淀川愛好会」の発足である。しかし、楽しいこととセットでなければ、ボランティア活動を続けるのは難しい。そこで思いついたのが、ボートの活用である。水面から眺める淀川の風景には格別のもがあった。この楽しみを市民の方々にも伝え、活動の輪

を広げたい。そう思って、淀川愛好会を市民サークルに拡大した。奇しくも河川法が大幅に改正され、環境の保全と住民参加が法的に裏付けられた年であった。

淀川愛好会では、「流域」に目を向け、下流域の大阪府だけでなく、源流域である滋賀県、京都府、三重県、奈良県や派流域である兵庫県にもまたがって、学習会や親水行事を展開している。そこで、威力を発揮しているのが、Eボートと呼ばれる10人乗りの組み立て式手漕ぎカヌーである。流域内のどこへでも手軽に運搬でき、地元の方との交流の推進に役立っている（写真－2）。



写真－2 Eボートの体験乗船

### 3. 寝屋川再生プランワークショップと「ねや川水辺クラブ」の誕生

その後、寝屋川市の環境保全審議会に委員として加わることになり、市民がもっと淀川に関心をもってはと呼びかけたところ、市民の関心は淀川ではなく、市の中心部を流れる寝屋川や網目状の農業水路であった。当時の寝屋川は水量も少なく、水辺に近づくこともできない魅力のない川だと思っていた私にとって、この市民の反応は意外であるとともに、大きな警鐘となった。それまでの私の関心は主に大きな川に向けられていたが、それでは不十分であることがわかり、学生たちと寝屋川の研究を始めることになった。

寝屋川市が市制50周年を迎えた2001年、その記念事業の一環として寝屋川再生プランワークショップを開こうということで、市民を公募したところ、定員30名の倍に及ぶ61名が応募し、応募者全員で熱心な議論が展開された。私も数人の学生とともにこのワークショップに参加し、市民と一緒に議論し、行動する機会を得た。当初の市の思惑では、寝屋川の本川沿いに市内で6ヶ所の拠点を並び、それぞれについて整備イメージを市民に描いてもらおうというものであったが、市民の関心は必ずしも本川だけで

なく、農業水路を含めた身近な水辺の再生にあった。

ワークショップでは、単に室内での議論にとどまらず、現地見学や観察会、河川清掃、Eボート試乗と多彩な取り組みが展開され、今後の継続的な活動に向けての組織作りにまで発展した。その結果生まれたのが、「ねや川水辺クラブ」である。ねや川水辺クラブでは、清掃部会、環境部会、親水部会、歴史文化部会という4部会を設けて、多彩な企画を立て、広範な活動を展開している。この市民の動きを受けて、市ではその後もワークショップを継続して開催し、市民と行政の協働による水辺再生が軌道に乗っている。

### 4. 寝屋川市駅前の親水整備（ねや川せせらぎ公園）

寝屋川再生プランワークショップで提案された水辺整備のひとつに、市の玄関口である京阪電車の寝屋川市駅前の寝屋川を親水性のあるものにしたかった。ワークショップが始まって1年を経過した頃、寝屋川市駅の立体交差化工事が完成し、駅前広場の整備状況が市民の目に触れられるようになったが、整備内容は道路主体のものであり、我々が議論した水辺整備は計画に取り入れられていなかった。我々はそれに驚くとともに、若干の怒りも込めて、一部でもよいからワークショップの提案を実現するよう、市に強く働きかけた。市では、戸惑いを覚えつつも、市民からの後押しを裏づけとして、いくつかの部署間での調整が図られ、やがて街づくり事業の一環として、親水整備が取り入れられることになった（写真－3, 4）。



写真－3 寝屋川市駅前（整備前）



写真－4 寝屋川市駅前（整備後）

整備内容の最大のポイントは、まず、人が安全に水辺に下りられるようにすることであった。それには河岸を後退させることが不可欠であると考えられたが、駅前広場とはいえ、それを削ることには相当の抵抗があったようである。しかし、結果的には、それまで道路面にあった歩道を河川の水面近くまで下げ、スロープや階段で接続させる要望が認められた。これによって河道断面が広がったため、低水路部分は若干断面を狭めることが可能となり、悪評の高かった鋼矢板の前に石積み護岸を張りつけることになった。さらに低水路内には飛び石をおき、潜水橋も設置された。高水敷にはせせらぎ水路も設置され、低水路の水をポンプアップして流している。その電源には新たに設置された風力発電機と太陽光発電機が用いられ、また、せせらぎ水路の入口には、寝屋川の源流部で伐採された間伐材を焼いた木炭による浄化装置が設置されている。潜水橋のそばにはウッドデッキやベンチも設けられ、すぐ下流には船着場も設けてEボートの発着ができるようになっている。高水敷と河岸には、流域に卓越する種を選んで多様な草木の植栽がなされた。夜間には照明がなされ、幻想的な雰囲気醸し出される。

整備工事は2005年4月に完成し、市民公募によって「ねや川せせらぎ公園」と名づけられ、多くの市民に活用されている。低水路部分には完成前から魚が寄り集まるようになっており、せせらぎ水路にも遡上している。昨年秋には、工事の完成を待ちきれずに、Eボートや復元した田舟を船着場から下ろし、大川まで下る船下りを実施した。

このように、市民の願いが実現して、ひとまずは万歳というところであるが、問題がなくはない。その第一は安全の確保である。大雨の時には、上流で水門が閉じられ、流量はほとんどなくなるものの、水深はかなり増加し、高水敷は水没するものと思われる。そのような時には警告灯が点き、立ち入り禁止となるが、市民にそれが徹底できるかどうか。また、普段でも、淀川からの浄化用水の流量が多い場合には、水深と流速がともにかかなり大きく、はまると流される危険がある。転落防止のための柵は一応つけてあるが、これを越えて中に入ることは容易にできる。水質浄化のためには、ある程度の流量が必要であろうが、できれば、普段、人が近づく時間に

は流量を減らして、安全を確保して欲しいものである。

次に、水質面においても必ずしも安全性が保証されているとは言い難く、子ども達が口にすると危険である。特に水量の少ない時には、水質が悪く、下水処理水の臭いがすることも。なお一層の浄化が望まれる。

生物環境としては、水中に関しては相当に改善され、特に石積みや入り江の効果が顕著に現れているが、高水敷や河岸の植物に関しては、人に踏まれやすいものがあること、水不足で枯れたものや枯れかかっているものがあることなどが問題となっている。また、できるだけ自然な状態を保ちたいというものの、放置すると草が伸びすぎて人が近づけなくなったり、外来種に駆逐されてしまう恐れがある。

ゴミの散乱も問題のひとつである。そこで、寝屋川市では、週に4回、せせらぎ公園の清掃と植物のモニタリングを有償で行なう団体を募集し、ねや川水辺クラブが落札した。水辺クラブでは、契約業務のほかに、草刈や水遣りなども合わせて行なっている。

このような市民と行政の協働によって、駅前の寝屋川は姿を一変し、見違えるほどに蘇ってきたが、一方で周辺の店舗の広告看板に、景観を著しく阻害するものがあることが気にかかる(写真-5)。街の活性化を促す意味で、規制は難しいのかもしれないが、広告の内容、文字サイズ、色彩などに自制が望まれる。一方で、このような環境整備がなされた意義について、気付いていない市民も多いものと思われ、掲示版等でPRを図ることも有効であろう。

駅前広場およびせせらぎ公園では既にオープンカフェやコンサートをはじめ、いくつかのイベントも実施されているが、これをいかに定着させていくかも今後の課題である。また、今回実施された水辺整



写真-5 景観を損なう広告看板

備は駅前の約200m区間に限定されているが、これをさらに上下流や周辺の水路にまで拡大し、さらに街づくりにつなげていくことも重要であろう。

## 5. 淀川左岸点野（しめの）地区の水辺整備

寝屋川再生ワークショップが次に取り組んだテーマは、淀川左岸に隣接する点野地区の水辺再生である。

先にも述べたように、寝屋川市内の農地には淀川の水が取水され、配られている。現在の取水地点は、摂南大学にほど近い木屋というところにまとめられており、そこから淀川左岸幹線水路が発し、途中、寝屋川市内だけでも十数本の支線水路に枝分かれする。点野は以前、淀川から直接取水する茨田（まった）樋門のあったところであり、現在でもその樋門跡が残っているが、訪れる人影もまばらで、水路は消えかかっている（写真－6）。3年前、ここに下水



写真－6 茨田樋門跡

道整備がなされた際、市役所の方針と地元の要望が一致し、農業水路を自然共生型のものに改修し、さらに樋門跡を公園化しようという機運が高まった。

そこで、さっそく水辺クラブが出動し、地元の方と協力して、水辺の植栽を行なった。その後、公園計画は寝屋川再生ワークショップのテーマとなり、とかく遊離しがちな市民と住民が融合した形で議論が進み、整備計画がまとまった。計画の一部はまもなく実施の運びとなっている。計画の目玉は、水路の復活、樋門跡の修景であるが、昔あった屯所や土汽車などの説明板の設置、淀川河川公園との一体化など、夢は大きく膨らんでいる。この地区は淀川の河川敷に隣接しており、堤防を越えると、そこには広大な淀川河川公園が広がっている。数百m下流には点野ワンドと呼ばれる入り江があり、数百m上流には点野船着場が整備されている。近くには、河川環境管理財団の太間（たいま）サービスセンター、

大阪府水生生物センター、大阪府太間排水機場、茨田の堤跡、点野スーパー堤防など、施設、史跡の枚挙に暇がない。これらが市民、住民だけでなく、来訪者にも一体のものとして意識、活用されることにより、街の活性化ひいては街づくりにつながっていくことが期待される（図－2）。



図－2 点野付近から見た寝屋川市の古地図

## 6. おわりに

このように、寝屋川市では今、市民と行政が一体となって水辺を通じた街づくりに取り組んでおり、その成果が着々と現れている。このような運動を支えているのは、多くの市民であることには違いないが、そこにはキーパーソンやキーグループの存在があることを忘れてはならない。個人が力を持ち過ぎるのは良くないが、市民側にも行政側にも意見を集約して人に伝える意欲と能力を備えたリーダーの存在することがポイントである。しかし、リーダーがいつまでも固定しているのは好ましくなく、今後、新しいリーダーをどのようにして育成していくかが重要な課題であろう。その意味で、若者や子ども達をこの運動にいかに関与させていくかが重要である。

また、財政難のおり、活動資金をいかに確保することも重要な課題である。ねや川水辺クラブは年会費2000円を徴収しているが、それだけでは運営はまかなえない。何か事業をしようとすれば、やはり資金が必要である。従来はいくつかの助成金をもらいながら活動を進めてきたが、同じところから継続して助成金をもらえることは希である。このような活動を持続、発展させるには、委託事業の継続など、安定した資金サポートの仕組みがぜひ必要である。